

土木遺産ツアーにおける土木コミュニケーションに関する研究（その2）

原口 征人¹・岩田 圭佑²・今 尚之³・石川 成昭⁴

¹正会員 (一社)北海道開発技術センター 上席研究員 企画部 (〒001-0011 札幌市北区北11条西2-2-17)
E-mail: haraguchi@decnet.or.jp

²正会員 (国研)土木研究所寒地土木研究所 (〒062-8602 札幌市豊平区平岸1条3丁目1-34)
E-mail: iwata-k@ceri.go.jp

³正会員 北海道教育大学 准教授 教育学部 札幌校 (〒002-8501 札幌市北区あいの里5条3丁目)
E-mail: nowkon@mail.momonga.gr.jp

⁴日本データサービス(株) 課長 水工第I部 (〒065-0019 札幌市東区北16条東19丁目1-14)
E-mail: s-ishikawa@ndsinc.co.jp

土木遺産ツアーでは、一般市民の参加者が現地において土木遺産を目にし、土木の専門家から説明（インタープリテーション）を受けることで普段は気づかなかった土木の仕事や技術の中身を知ることになる。その意識変化は土木をより深く理解することにつながっていると考える。本稿は土木遺産が土木と社会の間に立つコミュニケーションツールとして、どのように機能していくのかを土木遺産ツアーの場を通じて論考するものである。

Key Words : civil engineering heritage , tourism, sightseeing tour

1. はじめに

本稿では、一昨年の発表において整理した土木遺産ツーリズムにおける「土木コミュニケーション」について、昨年に引き続き議論を進める。平成30年度は北海道命名150年として、道内の各地でイベントが催されるが、土木遺産を含むインフラツーリズムがその中で取り扱われることになり、複数のツアーが各団体で実施される予定である。その一つ、国土交通省北海道開発局が進める「ほっかいどう学」の中では、一般の市民の皆さんに土木の果たしている役割や社会・環境で果たしている機能を理解していただく機会として捉え、市民向け講座やインフラツーリズムを複数、企画として打ち出している。筆者らは、一般への周知という土木の側の見方を俯瞰した位置で、これらのアクションについては「土木コミュニケーション」と呼び、土木の側と一般との相互理解の動きとして認識している。

本研究は、土木遺産が土木と社会の間に立つコミュニケーションツールとして、どのように機能していくのかを土木遺産ツアーの場を通じて論じるのが目的である。

2. 学習の場としての捉え方

筆者らは土木遺産ツアーの整理として、インタープリテーション¹⁾の概念を用いている。昨年も紹介した内容だが重要なので、提唱者チルデン（F.Tilden “Interpreting our heritage(1957)”）の原則を再録する。

- 1 来訪者の個性や経験に関連付けて行われたいインタープリテーションには効果が期待されない。
- 2 情報伝達それ自体はインタープリテーションではない。インタープリテーションは情報をもとにして新しい世界を開いて見せることである。情報伝達とインタープリテーションは異なるものである。しかし、全てのインタープリテーションは情報を含んでいる。
- 3 インタープリテーションは、素材が科学、歴史、建築、その他なんの分野であれ、いろいろな技を組み合わせた総合芸術である。それらは、ある程度は人に教えることができる。
- 4 インタープリテーションの主目的は教えることではなく、興味を刺激し啓発することである。
- 5 インタープリテーションは、部分でなく全体像を示すようにするべきである。そして人のある一面に対してではなく、まるごとの人間に語り変えるべきで

土木遺産ツアーにおける土木コミュニケーションに関する研究（その2）

原口 征人¹・岩田 圭佑²・今 尚之³・石川 成昭⁴

¹正会員 (一社)北海道開発技術センター 上席研究員 企画部 (〒001-0011 札幌市北区北11条西2-2-17)
E-mail: haraguchi@decnet.or.jp

²正会員 (国研)土木研究所寒地土木研究所 (〒062-8602 札幌市豊平区平岸1条3丁目1-34)
E-mail: iwata-k@ceri.go.jp

³正会員 北海道教育大学 准教授 教育学部 札幌校 (〒002-8501 札幌市北区あいの里5条3丁目)
E-mail: nowkon@mail.momonga.gr.jp

⁴日本データサービス(株) 課長 水工第I部 (〒065-0019 札幌市東区北16条東19丁目1-14)
E-mail: s-ishikawa@ndsinc.co.jp

土木遺産ツアーでは、一般市民の参加者が現地において土木遺産を目にし、土木の専門家から説明（インタープリテーション）を受けることで普段は気づかなかった土木の仕事や技術の中身を知ることになる。その意識変化は土木をより深く理解することにつながっていると考える。本稿は土木遺産が土木と社会の間に立つコミュニケーションツールとして、どのように機能していくのかを土木遺産ツアーの場を通じて論考するものである。

Key Words : civil engineering heritage , tourism, sightseeing tour

1. はじめに

本稿では、一昨年の発表において整理した土木遺産ツーリズムにおける「土木コミュニケーション」について、昨年に引き続き議論を進める。平成30年度は北海道命名150年として、道内の各地でイベントが催されるが、土木遺産を含むインフラツーリズムがその中で取り扱われることになり、複数のツアーが各団体で実施される予定である。その一つ、国土交通省北海道開発局が進める「ほっかいどう学」の中では、一般の市民の皆さんに土木の果たしている役割や社会・環境で果たしている機能を理解していただく機会として捉え、市民向け講座やインフラツーリズムを複数、企画として打ち出している。筆者らは、一般への周知という土木の側の見方を俯瞰した位置で、これらのアクションについては「土木コミュニケーション」と呼び、土木の側と一般との相互理解の動きとして認識している。

本研究は、土木遺産が土木と社会の間に立つコミュニケーションツールとして、どのように機能していくのかを土木遺産ツアーの場を通じて論じるのが目的である。

2. 学習の場としての捉え方

筆者らは土木遺産ツアーの整理として、インタープリテーション¹⁾の概念を用いている。昨年も紹介した内容だが重要なので、提唱者チルデン（F.Tilden “Interpreting our heritage(1957)”）の原則を再録する。

- 1 来訪者の個性や経験に関連付けて行われたいインタープリテーションには効果が期待されない。
- 2 情報伝達それ自体はインタープリテーションではない。インタープリテーションは情報をもとにして新しい世界を開いて見せることである。情報伝達とインタープリテーションは異なるものである。しかし、全てのインタープリテーションは情報を含んでいる。
- 3 インタープリテーションは、素材が科学、歴史、建築、その他なんの分野であれ、いろいろな技を組み合わせた総合芸術である。それらは、ある程度は人に教えることができる。
- 4 インタープリテーションの主目的は教えることではなく、興味を刺激し啓発することである。
- 5 インタープリテーションは、部分でなく全体像を示すようにするべきである。そして人のある一面に対してではなく、まるごとの人間に語り変えるべきで

ある。

- 6 子ども向けのインタープリテーションは大人用をやさしくしたものではなく、根本的に異なる方法が考えられなければならない。最大の効果を上げるには別のプログラムが必要になる。
- 土木遺産ツアーでは2と4の原則が重要である。

3. H29年度のツアー

平成29年度は、新たに土木遺産に加わった「滝の上発電所」の内部に入って（通常は非公開）、管理者から説明があることをメインに据え、その周辺の遺産を合わせてツアー化を図った。これにより平成27年のツアーで一度、来訪している2箇所「夕張川新水路」「舞鶴橋」が加わるようになった。その2つの見学先のリピーター対応として、夕張川新水路（ショートカット工事）が果たす役割（＝治水）の今日的な手法として進められている遊水地事業「晩翠遊水地」を施工現場を視察先に加えた。千歳川周辺に展開される遊水地群による、新たな治水方策である。

これにメインの視察先となる滝の上発電所が果たした石炭産業の電力化に鑑み、夕張に残される採炭の遺構「模擬坑道（国登録有形文化財、坑道内に創業時の機械類や支保工がそのまま残される）」を最後の見学場所とした。

全体として、夕張地方の産業・石炭と、利水・治水施設の発電所と河川の施設という流れになった。昼食にはこの地方で採れる野菜（治水による営農環境の改善結果）をふんだんに味わえる、ランチバイキングとした。

図-1 H29年の募集チラシ（観光ツアー会社作成）

4. アンケート評価とツアー要素の考察

ツアー終了後のアンケートを実施してきており、その結果を過去のツアーと比較検討することで、土木遺産ツアーの内容を考察する。表-1において本ツアーでの評価価格を、表-2ではツアー内に予めしつらえた要素を、過去3回のツアーとともに示す。

表-1 KLPによる土木遺産ツアー価格の評価

ツアー (実施料金)	①峠を結ぶ (2,800円)	②空知治水 (2,980円)	③道北 (3,980円)	④夕張 (3,980円)
上限価格	4,845円	5,639円	6,716円	6,569円
基準価格	3,411円	4,079円	4,961円	4,534円

表-2 ツアーごとに盛り込まれた要素の強弱の差

ツアーの要素	① 峠を結ぶ H23 (道東)	② 治水と橋 H27 (空知)	③ 都市基 盤 H28 (道北)	④ 治水と炭 鉱 H29 (夕張)
通常入れない場所	◎	○	○	◎
自然環境との調和	○	△	○	○
新設/遺産の対比性	◎	△	○	◎
解説(バス内・委員)	△	○	◎	◎
解説(現地・委員)	△	○	○	○
解説(遺産・管理者)	×	△	○	○
解説(新設・施工者)	◎	○	○	○
配布資料	×	◎	◎	◎
オプション(土産等)	×	△	○	△

今回④のツアーでは評価額が昨年③よりも下がった。各要素について昨年との比較では同等であり、理由は見いだせなかった。今後、分析を進めてよりの確な要素を見出せればと考える。自由記述との比較でみると、自然との対峙の部分で③の方が④より勝ったコメントが多く見受けられる。また②と同じ遺産が④に加わっていた点があるかと思われる。

5. おわりに

自由記述の文章内容を用いた分析を発表時に示す。

参考文献

- 1) キャサリン・レニエ（ほか著）：インタープリテーション入門—自然解説技術ハンドブック、小学館、1994。

（2018.4.9 受付）

ある。

- 6 子ども向けのインタープリテーションは大人用をやさしくしたものではなく、根本的に異なる方法が考えられなければならない。最大の効果を上げるには別のプログラムが必要になる。
- 土木遺産ツアーでは2と4の原則が重要である。

3. H29年度のツアー

平成29年度は、新たに土木遺産に加わった「滝の上発電所」の内部に入って（通常は非公開）、管理者から説明があることをメインに据え、その周辺の遺産を合わせてツアー化を図った。これにより平成27年のツアーで一度、来訪している2箇所「夕張川新水路」「舞鶴橋」が加わるようになった。その2つの見学先のリピーター対応として、夕張川新水路（ショートカット工事）が果たす役割（＝治水）の今日的な手法として進められている遊水地事業「晩翠遊水地」を施工現場を視察先に加えた。千歳川周辺に展開される遊水地群による、新たな治水方策である。

これにメインの視察先となる滝の上発電所が果たした石炭産業の電力化に鑑み、夕張に残される採炭の遺構「模擬坑道（国登録有形文化財、坑道内に創業時の機械類や支保工がそのまま残される）を最後の見学場所とした。

全体として、夕張地方の産業・石炭と、利水・治水施設の発電所と河川の施設という流れになった。昼食にはこの地方で採れる野菜（治水による営農環境の改善結果）をふんだんに味わえる、ランチバイキングとした。

図-1 H29年の募集チラシ（観光ツアー会社作成）

4. アンケート評価とツアー要素の考察

ツアー終了後のアンケートを実施してきており、その結果を過去のツアーと比較検討することで、土木遺産ツアーの内容を考察する。表-1において本ツアーでの評価価格を、表-2ではツアー内に予めしつらえた要素を、過去3回のツアーとともに示す。

表-1 KLPによる土木遺産ツアー価格の評価

ツアー (実施料金)	①峠を結ぶ (2,800円)	②空知治水 (2,980円)	③道北 (3,980円)	④夕張 (3,980円)
上限価格	4,845円	5,639円	6,716円	6,569円
基準価格	3,411円	4,079円	4,961円	4,534円

表-2 ツアーごとに盛り込まれた要素の強弱の差

ツアーの要素	① 峠を結ぶ H23 (道東)	② 治水と橋 H27 (空知)	③ 都市基 盤 H28 (道北)	④ 治水と炭 鉱 H29 (夕張)
通常入れない場所	◎	○	○	◎
自然環境との調和	○	△	○	○
新設/遺産の対比性	◎	△	○	◎
解説(バス内・委員)	△	○	◎	◎
解説(現地・委員)	△	○	○	○
解説(遺産・管理者)	×	△	○	○
解説(新設・施工者)	◎	○	○	○
配布資料	×	◎	◎	◎
オプション(土産等)	×	△	○	△

今回④のツアーでは評価額が昨年③よりも下がった。各要素について昨年との比較では同等であり、理由は見いだせなかった。今後、分析を進めてよりの確な要素を見出せればと考える。自由記述との比較でみると、自然との対峙の部分で③の方が④より勝ったコメントが多く見受けられる。また②と同じ遺産が④に加わっていた点があるかと思われる。

5. おわりに

自由記述の文章内容を用いた分析を発表時に示す。

参考文献

- 1) キャサリン・レニエ（ほか著）：インタープリテーション入門—自然解説技術ハンドブック、小学館、1994。

(2018.4.9 受付)